

III 抄録

(一) 大気汚染測定結果報告書 (昭和51年度)

Annual Report of Air Pollution Measurements
(1976)

テレメーター室

昭和51年度の大気汚染常時監視データをとりまとめて報告した。第I部では県24局(測定車を除く)、市22局、計46局の測定データを主として環境基準と対比して評価した。SO₂は改善の傾向はあるものの県南地域で不適合率が高く、長期的評価で88.9%、短期的評価で47.5%の達成率であった。NO₂は長期的、短期的評価ともにすべての局で不適合であり、中間目標を達成したのは3局のみであった。オキシダントは51年度の全国ワースト10局のうち6局を占めており、依然として全県的に濃度レベルが高い。第II部は測定データを統計、解析した資料篇(図、表)で構成されている。

(二) オキシダント日最高濃度、その出現時刻の分布について (海岸線からの距離)

Distribution of Oxidants Day-Maximum-Concentration and Peak-Time in Kantou Heiya

五井邦宏 湯沢修二

光化学スモック共同調査報告書(昭和51年度 ; 一都三県公害防止協議会)

概要

昭和49・50年に一都六県で光化学スモック注意報が発令された日(60・72日)を対象に、各県の代表局(46地点)を選定して、統計処理を行ない、オキシダント日最高濃度およびその出現時刻の平均的分布等をもとに、移流等について検討した。

この結果、高濃度日の日最高濃度は海岸線から20km以内、70km以上の位置で低くなっている傾向が認められた。

またその出現時刻は海岸線からの距離に比例して遅くなり、沿岸部では12時半頃、内陸70kmでは14時半頃になっている。従って高濃度日の日最高値、出現時刻は大規模海風の動態に左右されており、その侵入時刻、速度、方向について予測することが必要であろう。

(三) 上層風・気温分布と光化学スモック

Effect of Upper Wind and Temperature on Photochemical Smog

五井邦宏 茂木正一 湯沢修二 小林良夫 梅沢展夫

第18回大気汚染研究全国協議会大会発表(1977); 講演要旨集

概要

光化学オキシダント予測の気象要因として、上層の風、気温の鉛直分布が重要であること知られているか、その定量化は十分ではない。ここでは温位の鉛直分布積算値を風速で除いた指数を、昭和50・51年の館野のデータから求め、高濃度日の一都三県エリアの日最高値、および高濃度エリアとの対応について検討した。

その結果、両者ともかなり良い相関が認められたので、地域性また対象層高度について選定して用いることにより精度が上かると考えられる。

(四) 河川の生物学的調査

Biological Surveys of Streams

河川水質科 工場排水科

河川の生物調査報告書(荒川水系における生物相と水質についてII、公害センター・埼玉大学教育学部生物学教室)

概要

昭和48年に、荒川水系について、底生生物、浮遊生物等の調査、並びに水質調査を行ったが、満3年を経過した51年に、再び同水系について調査を行った。水質の化学分析値と、底生生物の種数、浮遊生物の種数との相関関係を調べたが、水質測定値の範囲が比較的狭い本水系は、全般的にみて水質と生物種数との間にあまり関連かあるとはいえなかった。

(五) しらさぎにおける有機塩素系農薬とPCBの含有量
Concentration of Organochlorine Insecticides and
PCB in Plumed Egret

大島淳彦 須貝敏英 谷口通郎

粕谷敏明 植野 裕 石山栄一

(浦和市三室のサキ繁殖地における落鳥実態調査報告書
昭和52年度・自然保護課)

概要

昭和47年以降毎年6、7月頃、浦和市三室のシラサキの集団営巣地において、サキ類の多数の落鳥、へい死が起きている。県環境部はこの原因究明のため毎年調査を行っているか、52年度も引続きPCB等の体内蓄積量の調査を分担した。肝臓中のPCBをみると、最高1.92ppmから最低0.35ppmであった。これは減少の方向に向いつつある事を示しているか、自然環境におけるそれらの残留の末に根強いことを示している。